

戦前・戦中・戦後の雑誌

1. はじめに

雑誌は新しい知識や情報、視点を広く紹介する読み物として始まったとされ、日本国内では、慶応3年(1867)に洋学者、柳河春三が刊行した『西洋雑誌』が最古といわれます。鎖国政策が終わり、徐々に外国文化が入り始める中、当時のヨーロッパの最新情報を日本人に伝えるものでした。

雑誌は、大正14年(1925)にラジオ放送が始まるまでは、新聞とともに国民に最先端の情報を伝える唯一の媒体であり、当時の世相の影響を受けながら、時に人々を牽引する役目も担いました。

戦前・戦中・戦後のそれぞれの時期に刊行された雑誌から、日本人の歩んできた時代の変遷を読み解きたいと思います。

2. 戦前の雑誌

明治政府は新しい時代の到来と政府の方針を国民に啓蒙するため、積極的に新聞や雑誌を利用しようと試み、輸送面では割引運賃を制度化し、そのため全国へ行き届きやすくなりました。

大正3年(1914)、ヨーロッパで第一次世界大戦が始まると国内は大戦景気に沸き、大衆小説や大衆演劇など、大衆娯楽が盛んになり、一方で新聞や雑誌を通じて人々は様々な社会問題を意識するようになりました。

そうした人々に合わせて、それまでの総合的な雑誌に加え、読者層を限定した雑誌が刊行されるようになりました。『伸びて行く』のような児童雑誌や、『婦人世界』『主婦之友』のような女性向け雑誌です。

また大正12年(1923)9月1日発生の関東大震災の惨状をいち早く全国に知らせたのは新聞とともに雑誌でした。

2. 戦中の雑誌

昭和4年(1929)世界恐慌のあおりを受けて日本国内ではアメリカ向けの生糸の輸出が激減し、深刻な不景気となって多くの銀行や会社が倒産しました。国民の不満が増幅する中、資源の少ない日本は中国大陆に活路を見出そうと軍事行動を拡大していきます。

国内も戦時体制が強化される中、出版物に対し、厳しい検閲が行われるようになり、政府の意に沿わない雑誌は出版活動を制限されました。そして児童向け雑誌や女性雑誌、青年誌は国民の戦意高揚に利用されました。昭和16年(1941)に太平洋戦争が始まると、労働者の相次ぐ出征で、労働力が不足し、深刻な紙不足となり、雑誌の発行そのものが困難となり、統廃合が進められました。

3. 戦後の雑誌

敗戦後、様々な雑誌が刊行され、読み物に飢えていた国民は何にでも飛びついたため、雑誌は出せば売れる時代といわれました。しかし、仙花紙と呼ばれる粗悪な紙に印刷されたものが多く、すぐにボロボロになり、また3合で酔いつぶれるカストリ焼酎(粗悪な密造酒)のように3号で廃刊になることが多い低俗で粗悪な大衆娯楽雑誌「カストリ雑誌」が巷に横行していました。

4. 暮しの手帖

昭和23年(1948)に花森安治(1911-1978)と大橋鎮子(1920-2013)が新しい婦人雑誌として『美しい暮しの手帖』を創刊。NHK朝の連続テレビ小説「とと姉ちゃん」(2016年/現在再放送中)は本誌の創業の軌跡をモデルとして制作されました。

編集長の花森安治の描く表紙の絵や写真を使ったレイアウトなど、時代を先取りしたデザインは今見ても新鮮です。昭和53年(1978)、花森の没後は影絵作家の藤城清治(1924-)が表紙を47回担当しています。

当初は季刊でしたが、昭和43年(1968)第93号からは隔月刊に変更されました。発行号数は100号ごとに「第〇世紀」と区分しています。

主な内容は家庭婦人を対象としたファッションや料理、各種商品テスト、医療健康関連の記事や、大橋のエッセイなどがあります。また「雑誌の全ての部分を自分達の目の届く所に置く」という理念から、外部広告は一切受けていません。

レイアウトや印刷手法など、当初のスタイルを守ってきましたが、平成19年、第4世紀26号・通巻376号より、文筆家の松浦弥太郎を編集長に迎え、現代的なスタイルを取り入れ、刊行を続けています。

1世紀第4号(昭和24年/1949)

和服の生地から型紙なしの「直線裁ち」で洋服を作る方法が掲載される。大橋自身がモデルを務める。「元始、女性は大太陽であった」女性解放運動家の平塚らいてう(1886-1971)が「ゴマじるこの作り方」の一文を寄稿。

1世紀第5号(昭和24年/1949)

「座る暮らしから腰掛ける暮らしへ」は、リンゴ箱や醤油樽を利用して、畳部屋用の家具を椅子とテーブルなどの洋式家具に作り変える方法を写真と文章で伝える。

また植物学者の牧野富太郎(1862-1957)やみやこ町出身のドイツ文学者、小宮豊隆(1884-1966)、赤毛のアンの翻訳者、村岡花子(1893-1968)も寄稿する。

牧野の「バナナの皮を食う」は植物学者らしい一文で、バナナで食べている部分は実は果実ではなく、内皮だと記す。

小宮の「鷺島の焼肉」は第一次世界大戦後に敗戦国のドイツ滞在時に見聞した出来事と太平洋戦争中・戦後の自分自身を比較しながら、戦後復興は気長に待つより仕方がないと結ぶ。

村岡の「母と子の書斎」は村岡の娘が高校2年生になり自分の勉強部屋を求め、1部屋を暖簾で仕切ると、何となく部屋が二つに仕切られた気分になるという話から、一人考える部屋は必要で、村岡自身は庭に面した家の外に板を貼り、そこで日没後まで読書に明け暮れるが、ここなら娘は入ってこないという。娘は手近に教科書や辞典などを置く場所が必要だが、それがここにはないからと結ぶ。